



TITLE:

もっとよくなる,もっとよくなる京
大図書館

AUTHOR(S):

清水, 健太郎

CITATION:

清水, 健太郎. もっとよくなる,もっとよくなる京大図書館. 静脩 1995,
32(3): 1-2

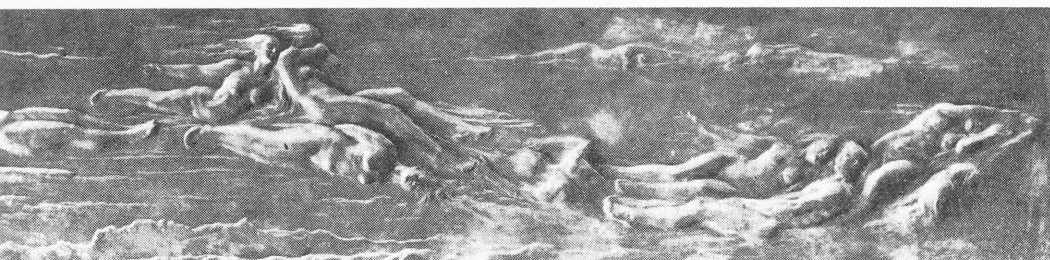
ISSUE DATE:

1995-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37359>

RIGHT:



静脩

1995年12月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 32, No.3

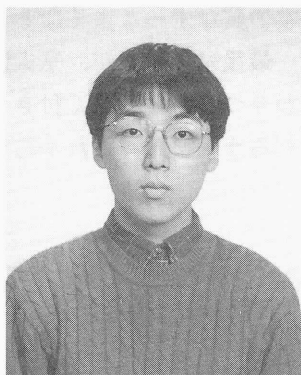
もっとよくなる、

もっとよくなる

京大図書館

理学部3回生 清水 健太郎

私がはじめて京都大学附属図書館に入ったのは高校の修学旅行の時であった。カウンターへ行って、見学させてもらえないでしょうか、という、本当はダメなんだけど、と言いつ



つも中へ入れてくれた。階段をのぼると、ずらっと並ぶ本、本。一面に広がる勉強机。なんと立派な図書館なのだろう。京大見学といいつつ図書館しか見る時間がなかったため、京大の建物はきれいなのだという大きな誤解を抱きつつ1年後に受験することになる。

私は図書館というものが好きである。本を読むのも好きだが、図書館の棚の前でたくさん本を眺めているのも好きである。この趣味から図書館学の講義をとり、その縁でここに文章を書かせていただくことになった。こんな視点で京大附属図書館について述べてみたい。

まずは機能面である。先にも述べたように建物は京大の中にあって飛び抜けて立派である。そしてサービスはどんどん良くなっている。日曜の開館をはじめとして、論文を検索できるCD-ROMの導入もあった。理学部中央図書室もそうであるが、やがて来るであろう電子図書館時代に着々と備えている。が、一方で確かに問題点は残っている。例えば新しい本しかコンピュータ(OPAC)で検索できないということである。データの打ち込みが気の遠くなるような作業であることが分かるのであまり強く言えないが、「静脩」1995年6月号で長尾新館長が実現への強い意欲を示していた。それに期待したい。

このように機能面で優れていると思うのだが、惜しむらくは宣伝が行き届いていないことである。友人のなかでも、レファレンスサービスやCD-ROMが図書館にあることを知っている人はあまりいない。これは私にはとても残念である。

次に雰囲気について。実は附属図書館の雰囲気

気は今一つ好きになれない。悪いというつもりは全然ない。しかし、私にとっては図書館は長い時間を過ごす場所であり、ぼんやり本をながめる場所であり、また探せば1人や2人はすぐに知り合いが見つかる交流の場でもある。最高によい場であってほしい。

雰囲気作りでの問題点は2つあると思う。まず1つ目に、きれいさっぱりし過ぎているのである。2階の勉強机など、まさに勉強するためだけに作られている。よく言えば機能的なのだが、それでは長い時間いる場所として物足りない。

これと逆にいい雰囲気だと思うのが、例えば理学部動植物図書室である。部屋に入るとまずウシの頭骨が目につく。棚や机を見れば、花はもちろん地球儀がある、オーム貝がある、クワガタムシがある。ポリネシアの絵葉書もきれいだ。部屋が小さいから良い感じだというのもあるが、ここなら心から落ちついて論文を読んでいられる。

附属図書館ではカウンター付近に花が飾ってあったくらいしか記憶にない。今の状態だと、高校の時に感動した立派さが逆に欠点になりかねない。ちょっとした物を飾ってみるだけで

いぶん雰囲気は変わると思う。しかし、きれいすぎる、などと思うのは、京大のきたない建物に慣れすぎてしまったからだろうか。

2つ目は、小説類など気軽に読める本が少ないことである。勉強していてちょっと休もうかというとき読みたくなる。これは一般の図書館の果たすべき機能なのだろうが、京都市は図書館があまり整備されておらず、京大周辺には十分な小説類をもった図書館がない。大学図書館に期待するのは間違っているかもしれないが、整備されると、私にとっては水を得た魚で、とてもうれしい。

こういったことのために、図書の購入希望をもっと活用できないものだろうか。まず、もっとリクエストが増えていいと思う。そしてまた、リクエストを出したのに購入されなかったという声を友人から何度か聞いた。図書購入費が不足しているのは分かるが、利用者のリクエストの数と実際の購入の数と両方ともに増えると、本の質がずっとよくなると思う。

最後になったが、京大図書館は今、急速に変わりつつある。長く付き合っていくことになるだろう図書館、これからも楽しみである。

一つの業務改善の試み -附属図書館相互利用掛-

附属図書館情報サービス課

相互利用掛 長 坂 み ど り

はじめに

相互利用・相互貸借（ILL=Inter Library Loan）とは、資源共有の理念のもとに図書館と図書館が、現物貸借や文献複写サービスにより利用者の情報収集に便宜を図るサービスである。附属図書館は、全学の窓口館として学内利用者の現物貸借や私費による文献複写依頼、国公立大学・その他の機関などからの利用を受け付けている。平成6年度の相互貸借業務全件数は、

約21,000件である。相互貸借件数は、年々増加し、そのサービスも多様化・高度化している。NACSIS-ILLシステム（On-Lineによる相互貸借サービス）が1992年に稼働し、その年の後半には、国立大学図書館の90%がシステムに参加した。京都大学附属図書館でもこのシステムを利用しているが、いろいろな問題を抱えたまま業務を進めてきた。

情報化・機械化社会といわれて久しいが、図